

プナンの「植物利用」と名前からみた「植物認識」

小泉都（京大）

研究の背景

ボルネオでは、植物に関する民俗知識の研究は農耕民族中心に行われてきた。また有用植物や伝統的農業に着目したものがほとんどで民俗分類など認識に関わる分析は行われていない。狩猟採集民族については、主食であるサゴヤシの利用に関するものや一部の有用植物に関する民俗知識についての研究がいくつかあるのみである。

ボルネオの狩猟採集民族は、森林内で移動生活を営んできた。香木などの森林産物と交換に農耕民族から鉄などを得てはいたが、ほぼ自給自足的な生活を営んできたとされる。彼らのほとんどはこの数十年の間に定住化して農耕をはじめた。とはいえ、現在でも農耕民族に比べて森林への依存が強く、また高い年齢層の人々は伝統的生活の体験がある。彼らの知る植物の有用性や彼らの植物の認識を研究することは、これからの森林利用を考える上で、地域住民から学ぶ、地域住民の生活を尊重するといった視点から有効であろう。

以上のような問題意識から、狩猟採集民族のひとつであるプナンの植物知識を調査した。

対象民族 西プナン、プナン・ブナルイ（約100年前にサラワクから調査地域へ移動）

調査地 東カリマンタンのロング・ブラカ村（カヤン川の支流バハウ川のさらに支流のルラー川沿い、カヤン-ムンタラン国立公園内）

調査期間 2002年の6ヶ月間。

調査方法 村人と植物採集を行い、その際に植物の名前・利用法などを聞き取る。

結果

調査期間中に900標本、560種ていどの植物を採集した。これまでに503種を種レベルまで同定した。分類群では、シダ12種と菌類5種以外は種子植物である。採集種うちの約80%には何らかの使用法があるとされた。また落花などの不完全な標本とラン1種と菌類2種を除き、インフォーマントは植物名を答えることができた。ただし、1種1種に対する名前ではなく、あるグループに与えられる包括名のみが答えられたものもある。（植物利用と植物名についての詳しい結果は発表で）。